禁飼育

この作品はフィクションであり、 実在する
人物・地名・団体とは一切関係ありません。
18 歳未満の閲覧購入はご遠慮くださいませ

ただいま本編制作修正中により、 体験版内の画像も
本編にて修正する可能性がございます。
予めご了承くださいますよう、 お願いいたします。

愚かな白雪姫

○荻窪　ねむり

今作のヒロイン

まったりお気楽で愚鈍かつ、お肉たわわ体型な女学生。

クラスで孤立してる為、若干周囲に対して冷めている。

授業だけでなく体育がやや嫌い。

好きなのは、黒ニャンコ。林檎カップケーキ

○群青路（ぐんじょうじ）マヤト

日本史教師。長身細身の姫カット黒髪の蛇顔。

色白端正な顔立ちだが、厳しくて近寄りがたい雰囲気がある。

自身より下の人間には見下す要素がある。喫煙者

年齢:37歳 / 身長:180cm / 体重:68kg

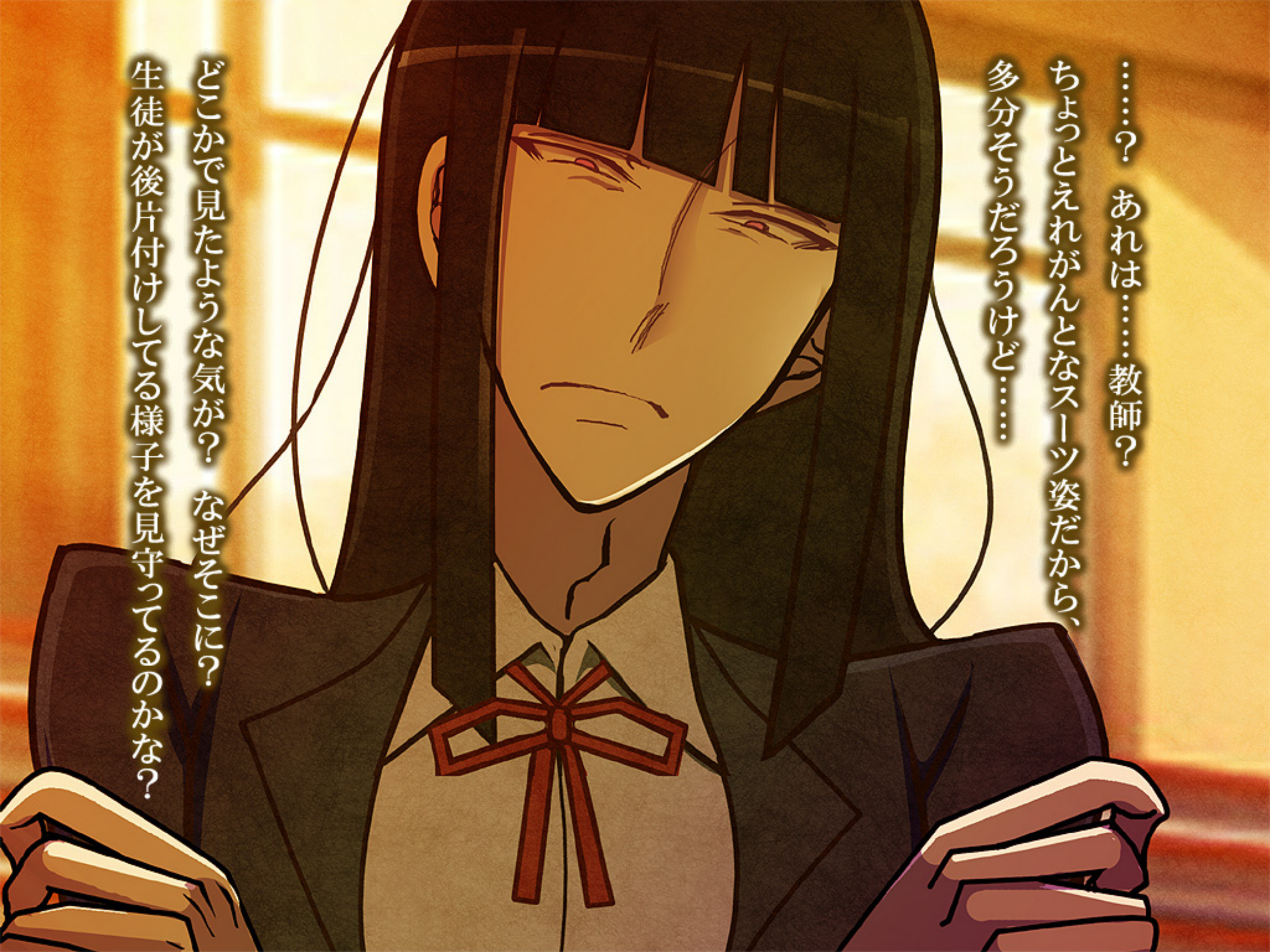
号令と同時に、
ボールを強く叩く音が響き渡る中、
自分も負けてられないなと闘志を燃やす。
今日は一段と蒸し暑くてフラフラするが……
どこか心地よさを覚えてしまう。

「はー……はー」

ダラダラと肌の表面から零れ落ちる液体は、
まるでシャワーを浴びたようで、とても気になる。
でもそれほど頑張ったという事だろうか？
いや……単なる汗っかき体質と、
室内のこもった空間のせいだろう

ホイッスルの音と同時に、片付け始める
周囲の生徒の手際の良さに感心してしまう……
まあ、早く帰りたいという一心があってこそだろう。
壁にかかってる大きな時計に目をやると、
もうそんな時刻に……私も帰ろうとした。

ふー……
ボンボンと地面に叩きつける白いボールを見つめる。
一人で練習しても、うまくなってるか、
わからないや……
ボールを抱えながら、眩しい日差しを差し込む
窓へと目をやった。


……？　あれは……教師？
ちょっとえれがんとなスーツ姿だから、
多分そうだろうけど……
どこかで見たような気が？　なぜそこに？
生徒が後片付けしてる様子を見守ってるのかな？

……気のせいか腕組んで……
こっち見てるような気がするんですが
まさか……怒ってる？

お前、なんで片付けしてへんねん
みたいな顔して……

変な気まずさが加速する恐怖に、
すぐさま目をそらし、片付けしてから
逃げるように体育館を後にした。

「はー……驚いた……」

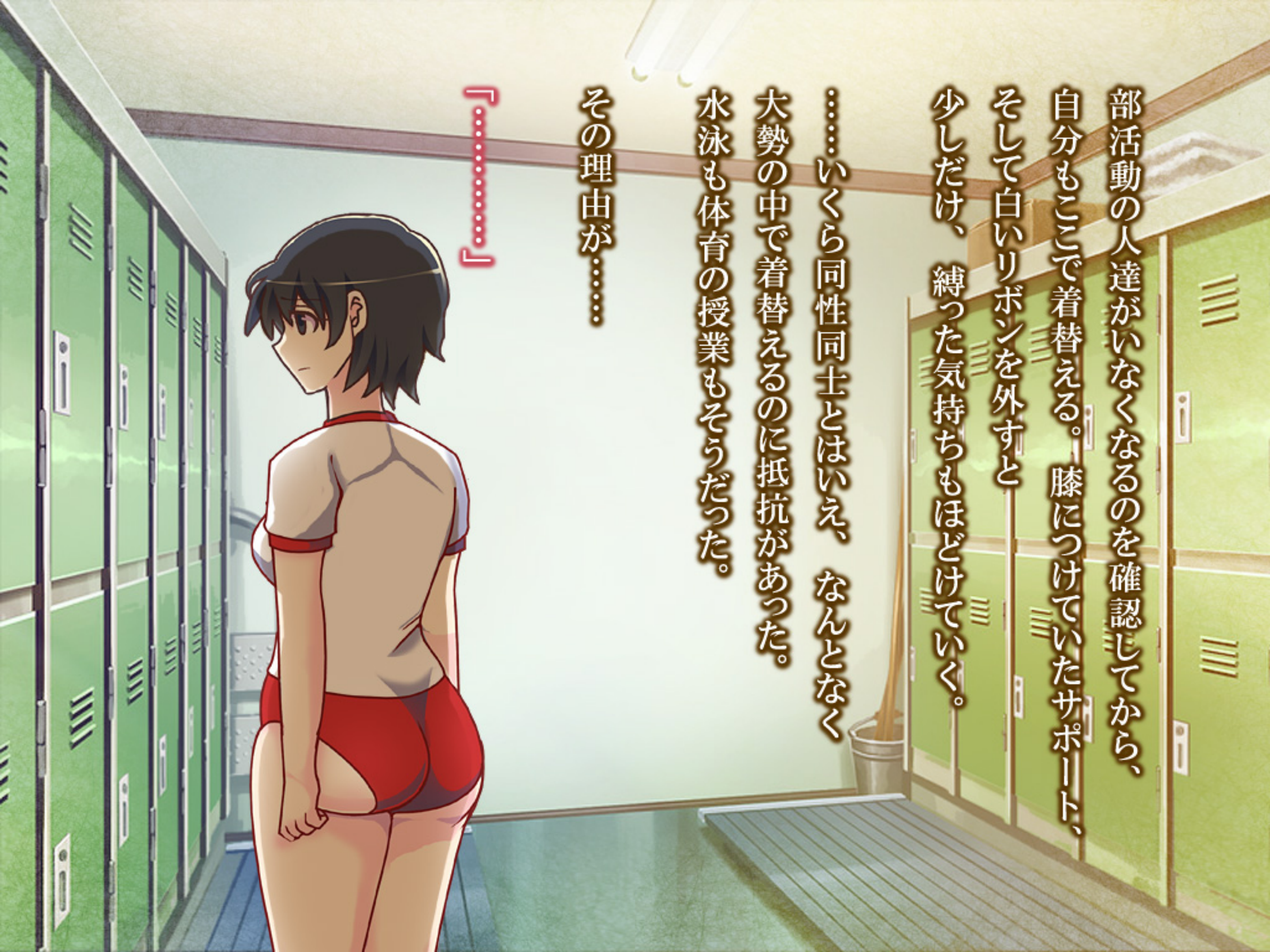
別に悪い事なんざしてないが、
警察に見つかった物取りみたいな気分だった。

それはさておき……

カチャ……

よし……誰もいないね。

部活動の人達がいなくなるのを確認してから、
自分もここで着替える。膝につけていたサポート、
そして白いリボンを外すと
少しだけ、縛った気持ちもほどけていく。
……いくら同性同士とはいえ、なんとなく
大勢の中で着替えるのに抵抗があった。
水泳も体育の授業もそうだった。
その理由が……

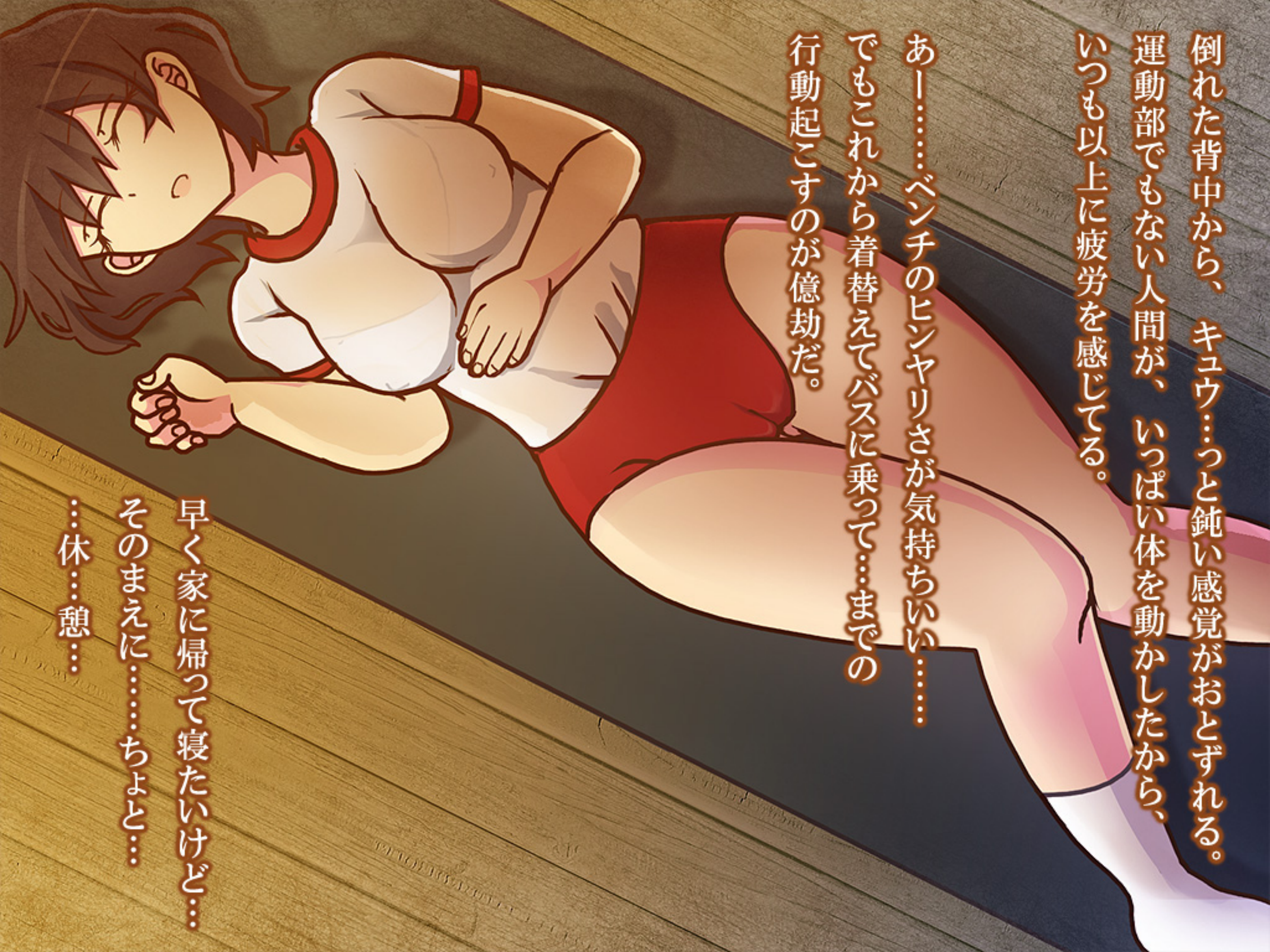


「……」

ドサリ

「はー……つかれたぁ……」

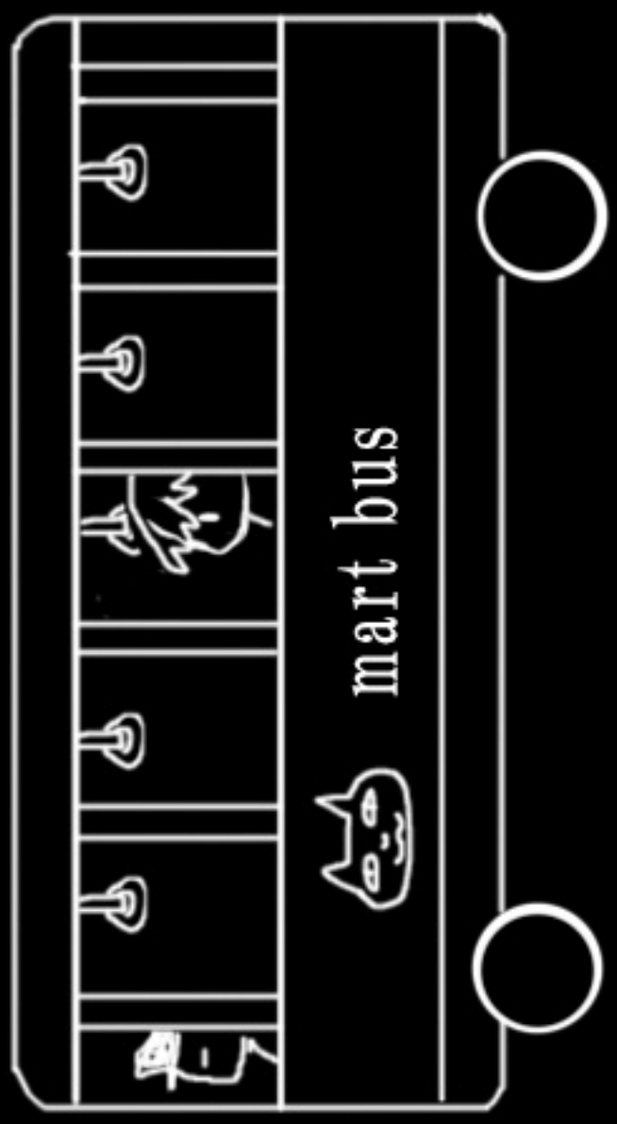
誰もいない場という事もあり、
緊張の糸が切れたのか、
入り口付近に設置されてるベンチへと
倒れるように寝っころがる。


倒れた背中から、キュウ…っと鈍い感覚がおとずれる。
運動部でもない人間が、いっぱい体を動かしたから、
いつも以上に疲労を感じてる。
あー……ベンチのヒンヤリさが気持ちいい……
でもこれから着替えてバスに乗って…までの
行動起こすのが億劫だ。
早く家に帰って寝たいけど…
そのまえに……ちょと…
…休…憩…

シガー
シガー
いかがかな?
ドサッ

「っは……何時！？
わっ十五分も寝てた……バスきちゃう！」

更衣室の掛け時計の時刻に絶望しつつ、
慌ててベタベタな体操着を脱ぎ捨て、
ベタベタ体の気色悪さを覚えながら、
着替え始めた。


mart bus

ん～～～～～～激しく動けば、
御飯も美味しいし、よく眠れる。
だからなのか、今日はなんとなく気分がいい。
昇降口に辿り着いて、自分の下駄箱を開け……
……なにこれ？
紙袋が入ってある。

持ってみると少し重みがある……

しかも達筆な字で「清き思ひ出」と書いてある。

……清きっていうのもあれだけど、

思ひ出って……「ひ」って

中は……小さいビデオテープが一つ入ってる。

色々と痛いイタズラだな……

付近のゴミ箱に捨てて教室へ向かった。

ひって何？

大きく息を吸って吐く……

大丈夫。

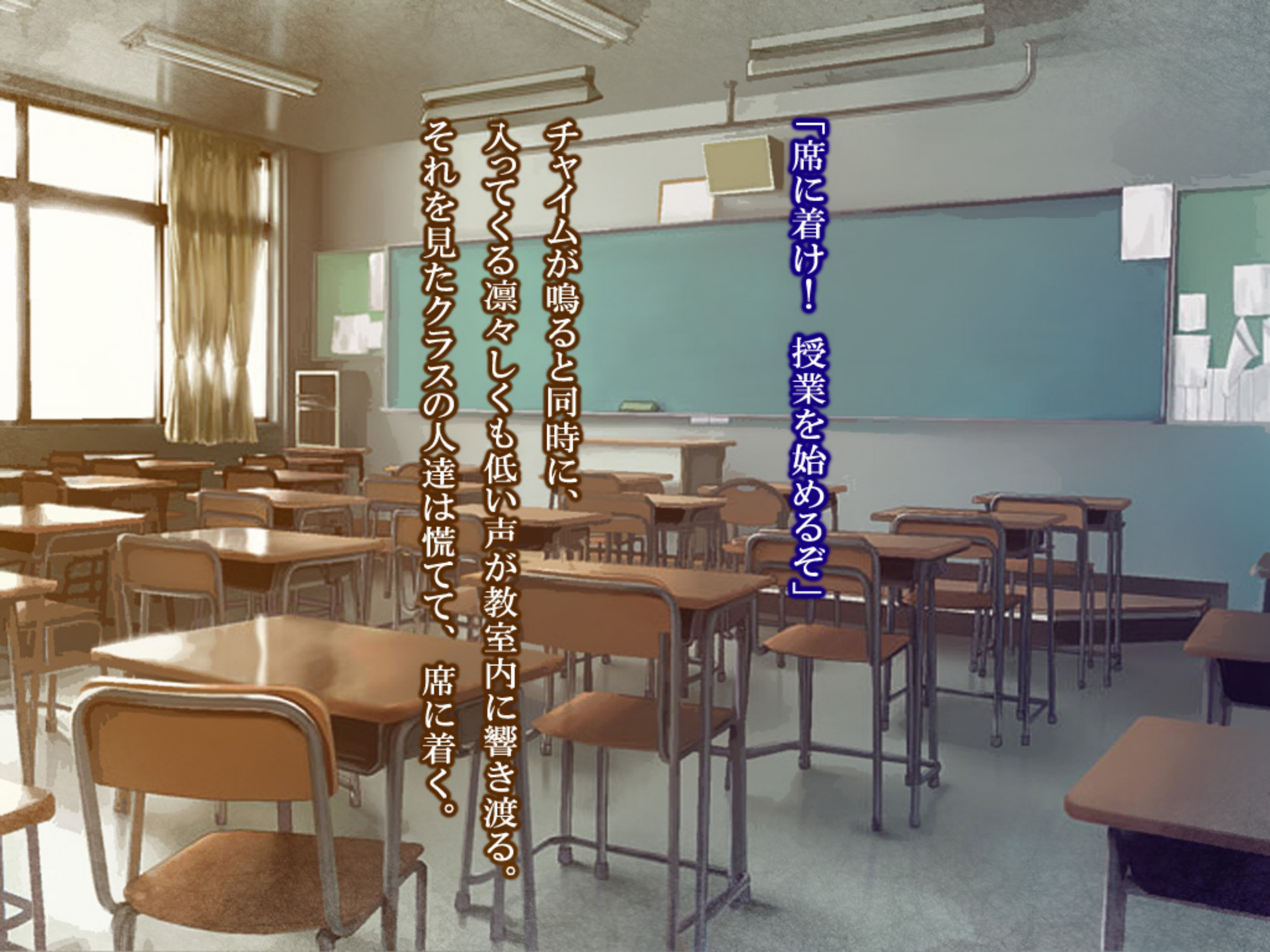
心の中でそう言い聞かせ、

そして意を決して扉を開けると、

さっきまで騒々しい教室内が一瞬で静まる。

まるで厳格な教師が来たような反応だが、それならまだいい。
でも私の場合は違う。明らかに冷めたような、寧ろ
汚い虫を見るような雰囲気だったからだ。

……それらを気にしないよう、自分の席に着く。
すると教室内は、いつものように騒ぎだして、ホッとする。



「席に着け！　授業を始めるぞ」

チャイムが鳴ると同時に、
入ってくる凛々しくも低い声が教室内に響き渡る。
それを見たクラスの人達は慌てて、席に着く。

あれ、この先生どこかで……っあ。昨日体育館でガン飛ばしてた、日本史の群青路（ぐんじょうじ）マヤト先生……

確か風紀に厳しくて……それから居眠りしたら絶対ダメな教科だ。

穏やかで、うるさく言わない教師の授業は大抵、居眠りしたり、落書きしたり、早弁したりとダラーンと過ごせるラッキー授業だが、この先生の場合はそんな事したら、自決そのもの。

「今日は第二次世界大戦、また太平洋戦争について
勉強する。ここは試験に出しておくので、
必ず覚えておくように」
!?
その言葉に皆はワッと教科書を広げ、
ノート取る姿勢に入る……試験に出るとなったら
聞かざるを得ないじゃないか。

早いペースで授業は進むが、教え方がとても上手く、
不思議と頭に入るのはなぜだろう？
聞く姿勢があるから？
それとも先生に怒られたくないから？

……でもそんな先生が、どうして昨日、
体育館にいたんだろう？

あの先生ってなんか部活の顧問やってたっけ？
えーっと……あ、そうだ剣道だっけ？

「ではここの問いを……荻窪」

「は、はいっ!!!」

ギャー当てられた。しかも少し上ずった返事…

こんな間抜けな返事してりゃ、いつもなら

教室内から静かな笑いが出てくるが…

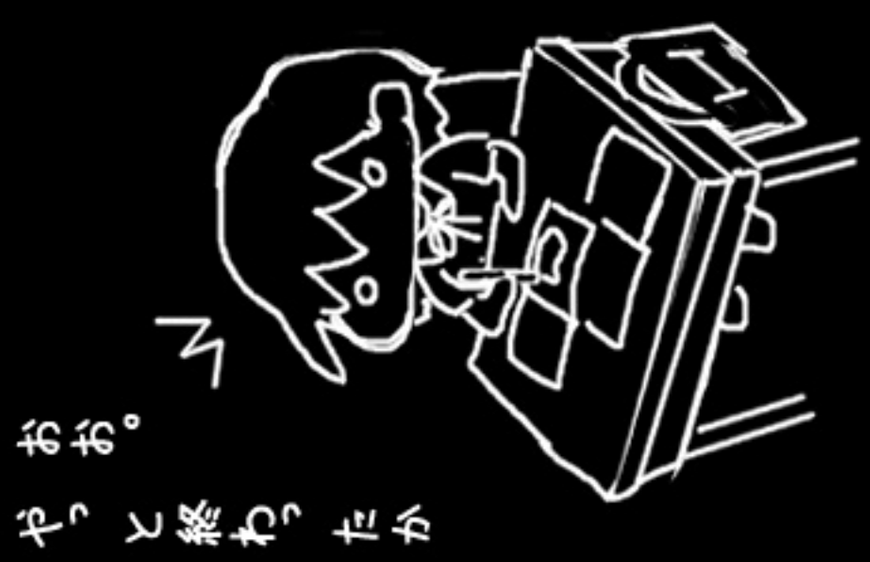
しかし今、冷戦のような授業に

そんな空気は一切許されないのをわかってるのか

誰も笑っていない。

その空気に少しホッとし……てはいない。

「終戦日は、昭和年何月何日だ？」
名指しで当てられると焦ってしまう上に、間違えたら
怒鳴られそうな雰囲気に、どうにか教科書を手に、
先生の問いの答えを探しだす。えーっとえーと…
あ、これかな？
「昭和二十年の八月十五日です」
「我が国は勝ったか？負けたか？」
「ま、負けました」
「その通り。座っていいぞ」
はー……間違うと恥だから、答えられてホッとする。
一番前のはしっこの席って、当てられやすいのよね…


なんだ
やっぱ繋がってる
なんで

「うへぇ～日本史って気い張るから疲れるし、
今回の授業範囲広すぎー」
「群青路、不意打ちで当ててくるのほんっと心臓に悪い」
わかるわかる……次の授業の教科書を出しつつ、
クラスメイトの聞こえる雑談に心の中で頷いた。
「でも群青路って…ちょっとかっこいいよね」
「あ、わかる。怖いけど背高くて細いし、
それにあの顔立ちでしょ？　隠れファン多いらしいよ～」
……別にゴシップとか興味ないけど
人気あるんだ、あの先生

「え～競争率たかそ～…というかいい加減、
彼氏見つけないとなぁ～もういない歴4か月なんだけど」
「あたしらの年で今も経験ない人ってありえないしね」
「え～うっそ～～いんの～～？？」
私、未経験ですが、ありえないですか？

キーンコーンカーン

放課後

やっぱは未経験って負けなのか

「ふぅ……」

一人練習し終えると同時に周囲を見回す…

…いない。昨日の群青路先生のあのガン見が

あったから、今日の練習はビクビクだったけど…

正直な話、拍子抜けした。

いやいや。別に会いたいわけでもないのに…

…それでも……って、さっきからなに自意識してんだ、

このブタ（自虐）

「あそこにいるの同じクラスの荻窪さん？バレー部だっけ？」
「さぁ？　でも来週のテストがあるからあれじゃないの？」
「あー……ていうか荻窪さんって足ふっといよねー」
「っしっ！　だめだよ本当のこと言ったら～…それに
独り寂しく練習とか引くわー」
「あのこ友達いないしねー。まーあいうことすれば」
「それより帰り、どっか寄ってかない？」
「そうだねー」

「……はぁ」

さっさと帰ろう。

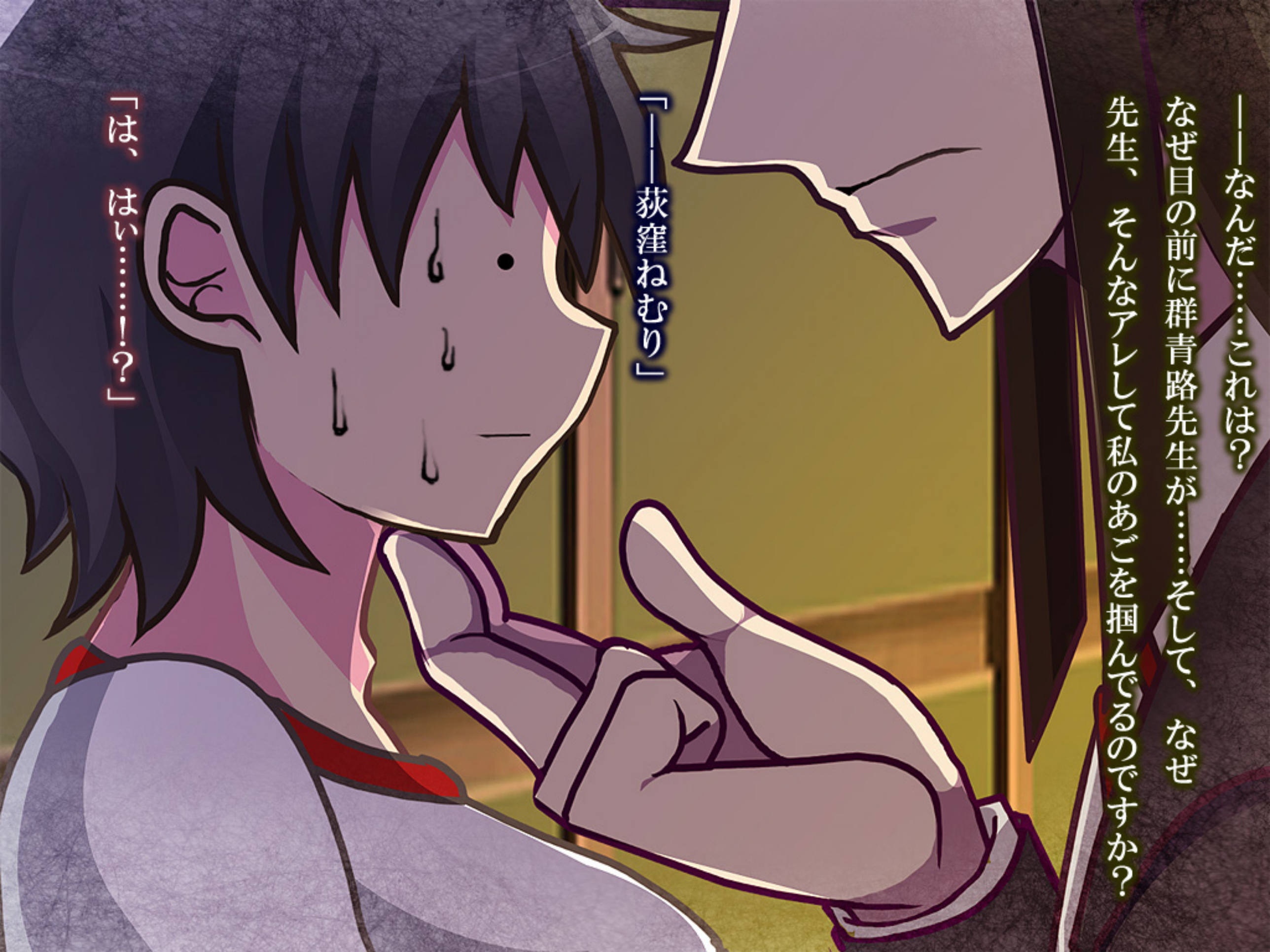
大量に汗かいたので匂いが気にする……

着替えようと、誰もいない女子更衣室に入ろうとした

その時、突然背後からグッと肩を掴まれ……

ふぎゅっ

脳内コンラン
うふふ
聞きました？奥さん
!?
!?

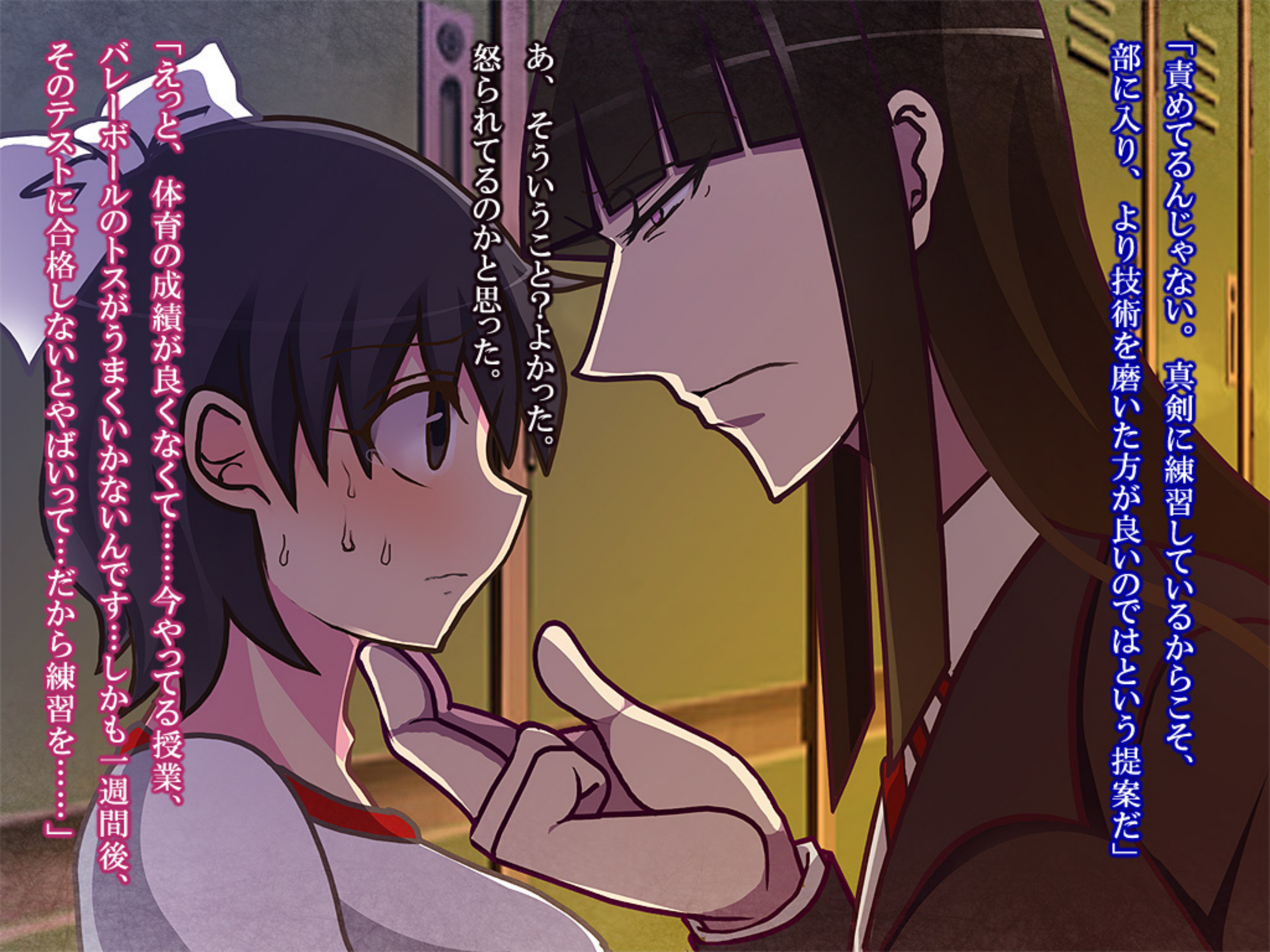

――なんだ……これは？
なぜ目の前に群青路先生が……そして、なぜ
先生、そんなアレして私のあごを掴んでるのですか？
「――荻窪ねむり」
「は、はい……！？」

「……体育館で一人バレーの練習をしてるが……
どういうつもりだ？　バレーボール部に君みたいな
女学生はいないと聞く」

ど、どうしよう……
見下ろす先生の視線が怖くて
どう言えばいいのか……
いや、悪い事なんて何もしてないが
それでも……ど、どう言えば……

「あ、あの、ご……ごめんなさい。勝手なことして」

……長い沈黙……
じっと見つめる鋭い目つきに
怒鳴られるのかと思うと
もうだめだ。涙腺が
仕事しようとしてる……
やめてくれ。こんなことで
泣くなんてあまりに
みっともない……


「責めてるんじゃない。真剣に練習しているからこそ、部に入り、より技術を磨いた方が良いのではという提案だ」
あ、そういうこと？よかった。怒られてるのかと思った。
「えっと、体育の成績が良くなくて……今やってる授業、バレーボールのトスがうまくいかないんです…しかも一週間後、そのテストに合格しないとやばいって…だから練習を……」

「それなら、誰かと共に練習すれば良いのではないのか？」

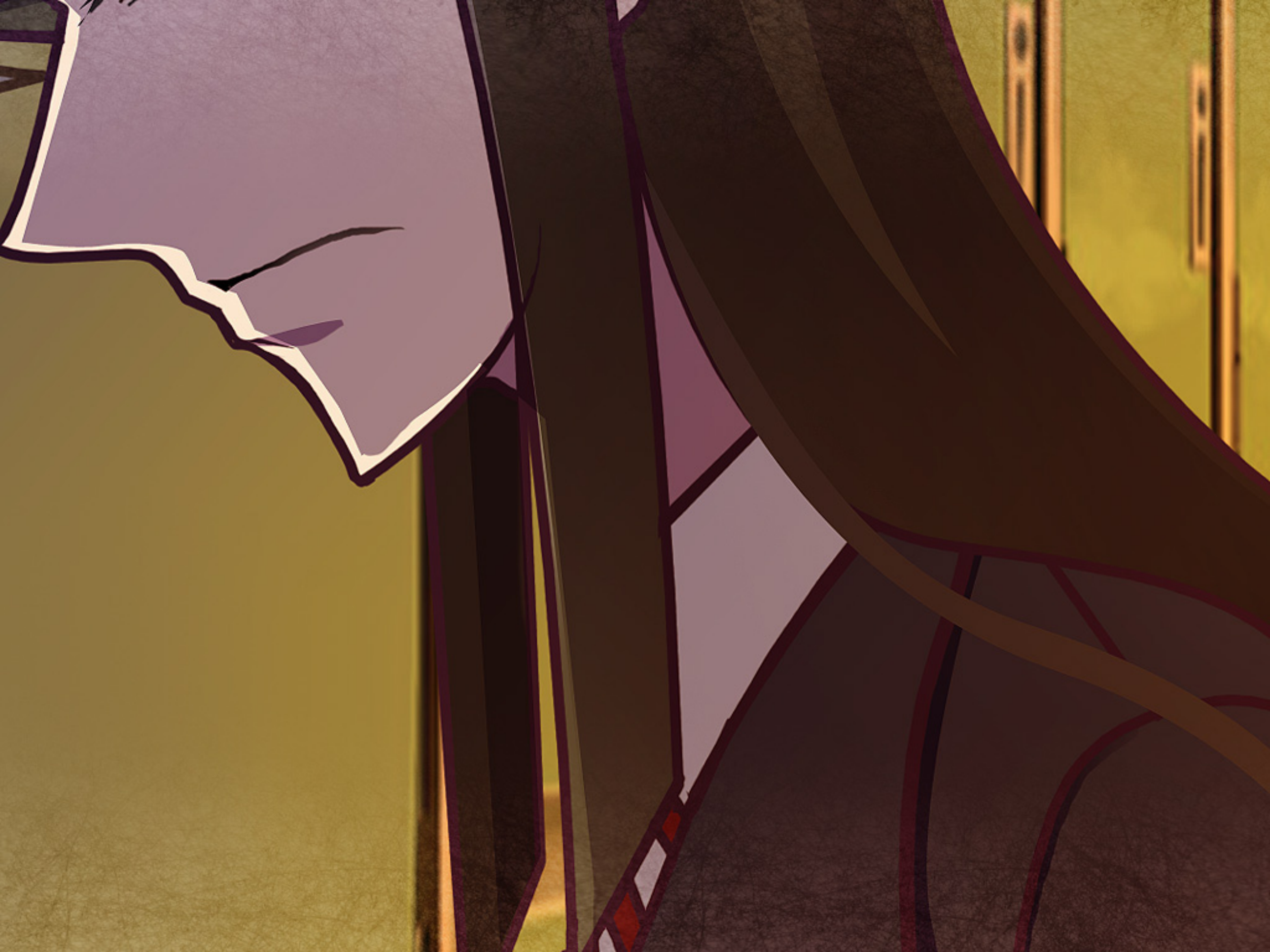
それは、そうかもですが……痛い所を突かれる。

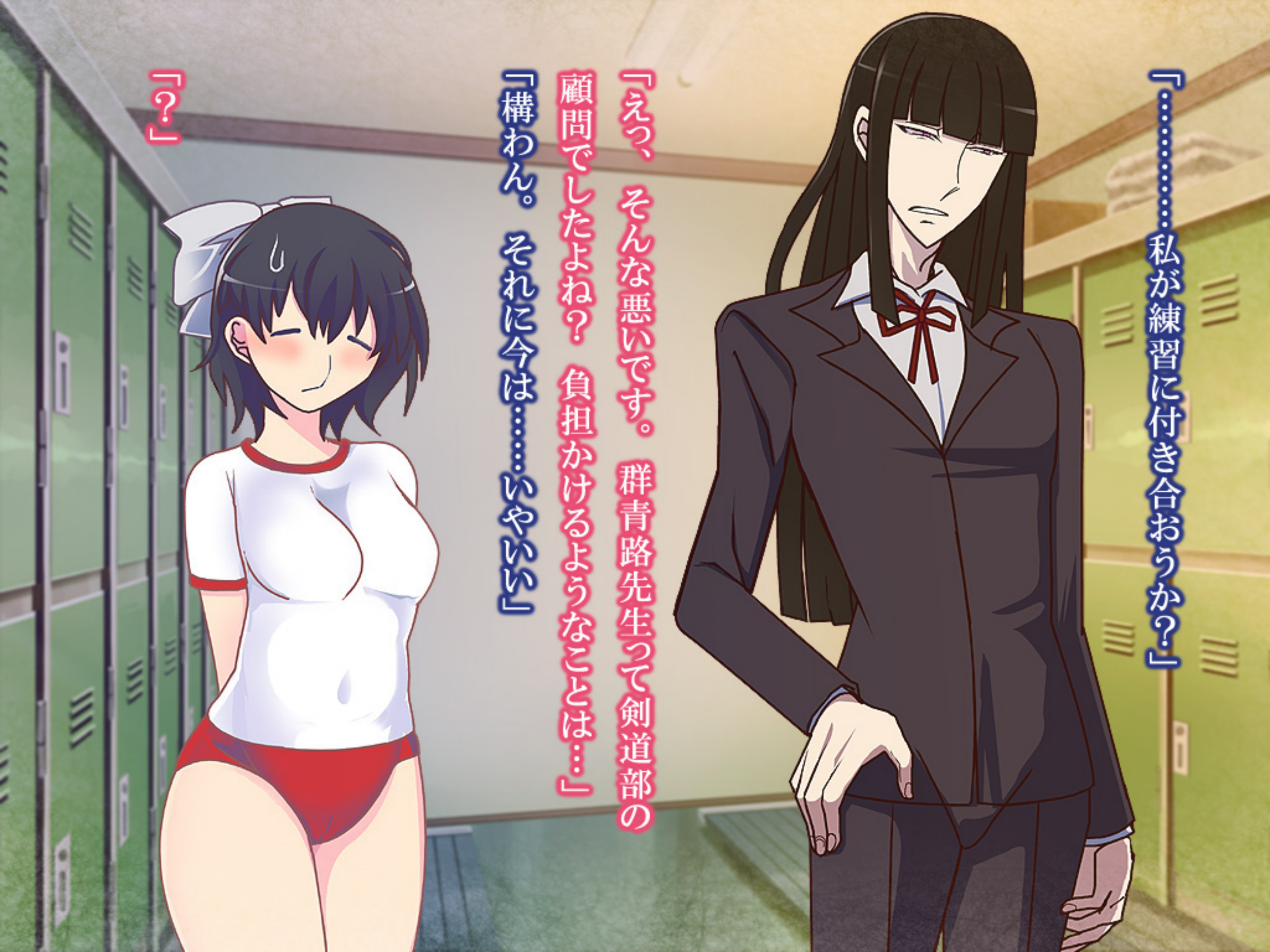
ほっ

あごクイ
びっくり

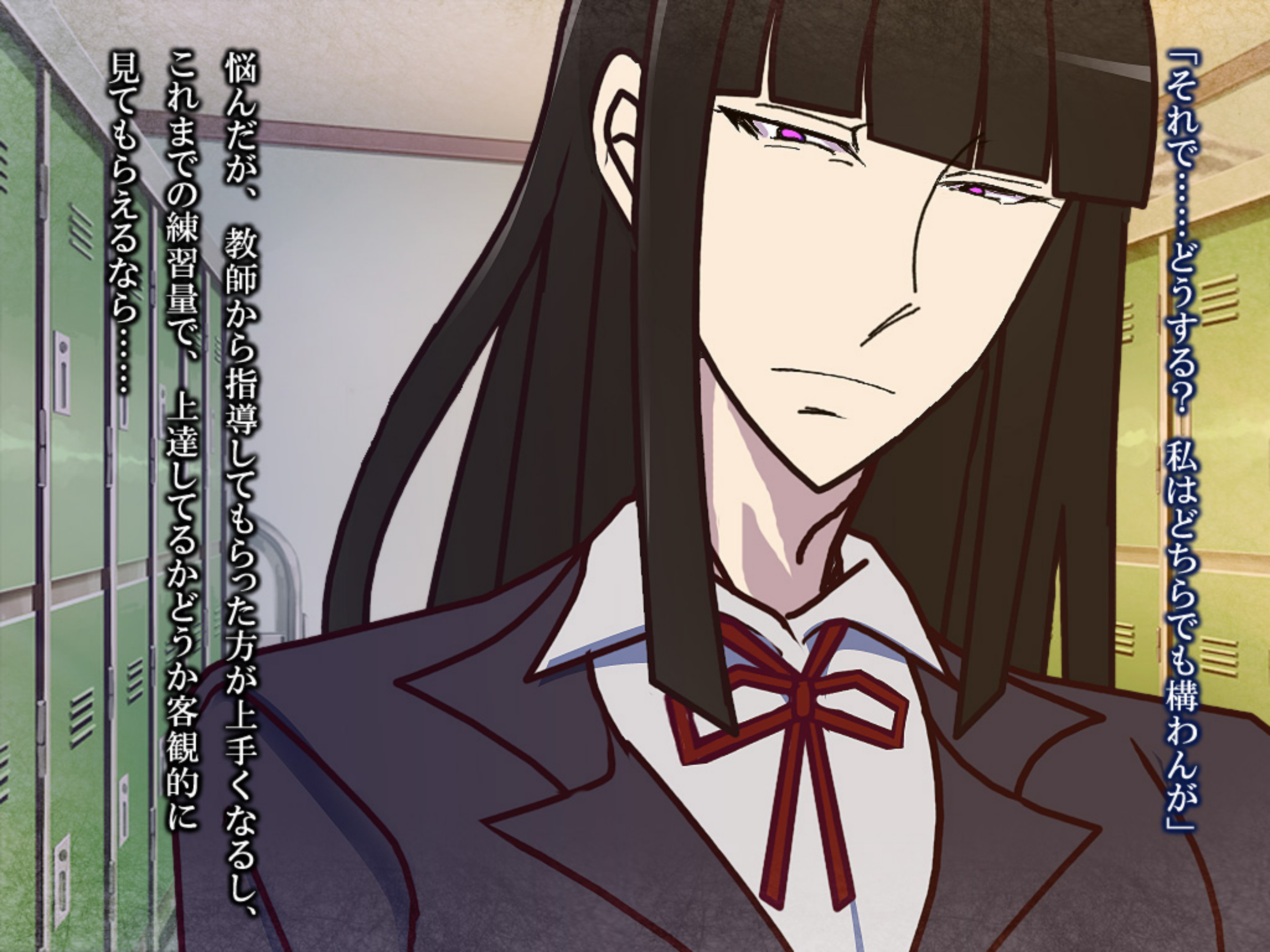
「ひっ……一人で、したいんです。自分の都合で相手に付き合わせるとか…申し訳なくて」

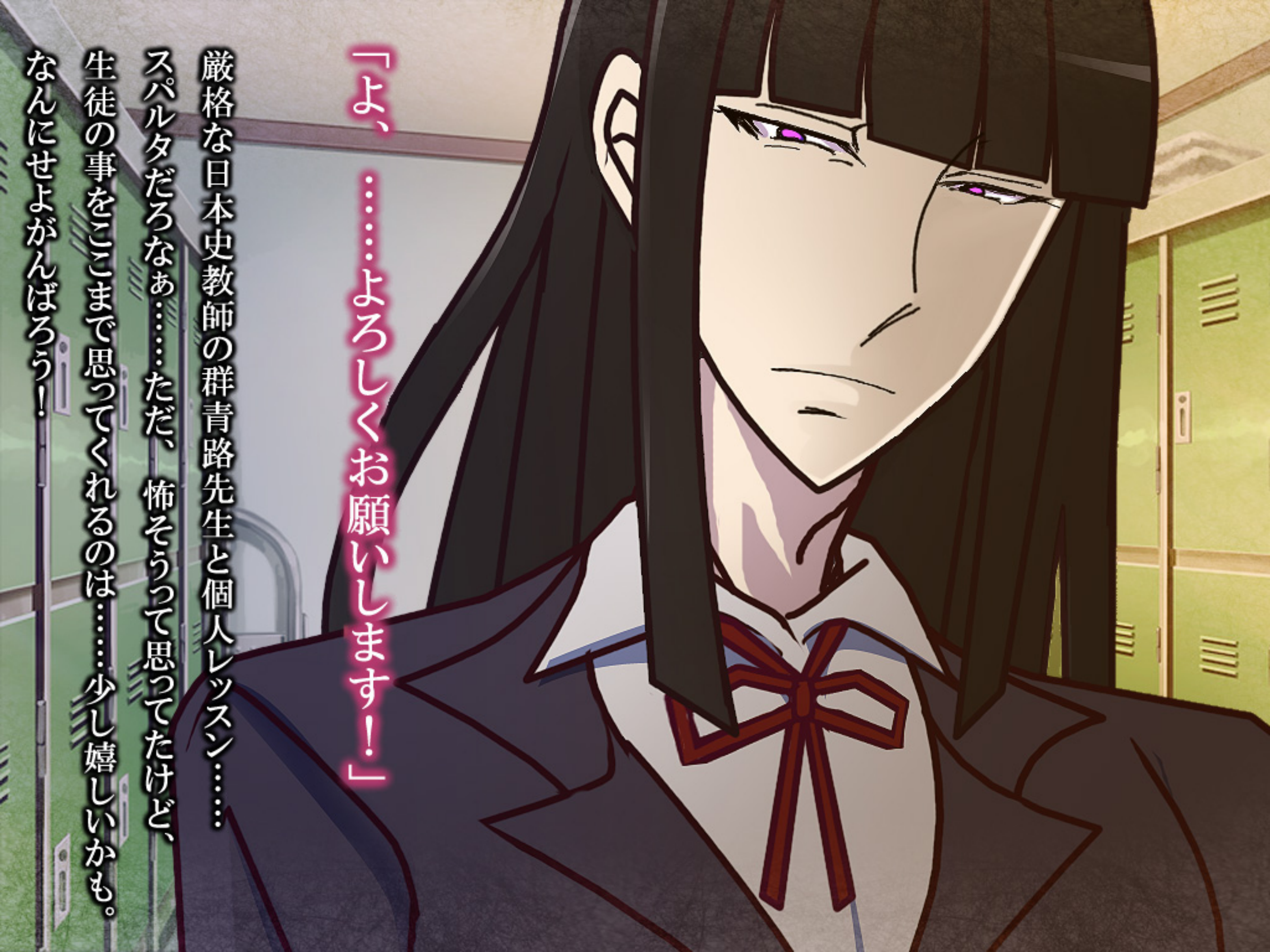
というか、本当は……

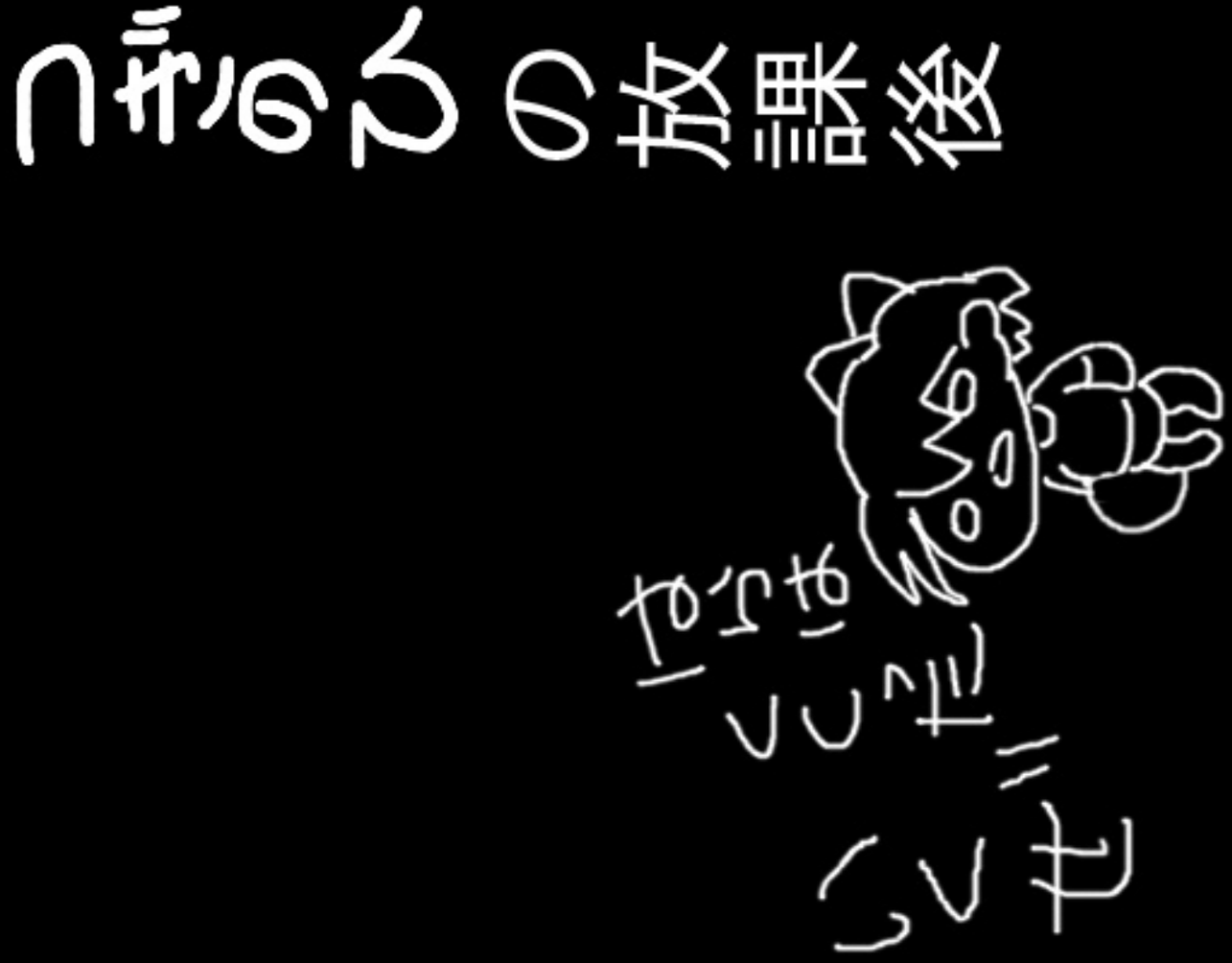



「……私が練習に付き合おうか？」
「えっ、そんな悪いです。群青路先生って剣道部の顧問でしたよね？ 負担かけるようなことは…」
「構わん。それに今は……いやいい」
「？」

「それともなにか？　私では不服か」
「いえいえいえ！　協力して下さるのは嬉しいです…
けど……どうして私なんかを？」
「日々の練習は上達するが、無駄な動きばかりで
その域にすら届かぬ君が……見てられんだけだ」
つまり酷いってことね。あんまりやぁ…
……でも、キチンと見てくれたんだって事だよね。
そうか、前にギャラリーからガン見してたのはそういうことか。


「それで……どうする？　私はどちらでも構わんが」
悩んだが、教師から指導してもらった方が上手くなるし、
これまでの練習量で、上達してるかどうか客観的に
見てもらえるなら……


「よ、……よろしくお願いします！」
厳格な日本史教師の群青路先生と個人レッスン……
スパルタだろなぁ……ただ、怖そうって思ってたけど、
生徒の事をここまで思ってくれるのは……少し嬉しいかも。
なんにせよがんばろう！



おお、群青路先生のジャージ姿……いつも
えれがんとなスーツだったからなんか……かっこいい

「よ……よろしくお願いします」
「確認したいのだが、テスト内容はどうなっている？」
「あ、はい。えっと二人一組になって
往復二十回トスをこなせば合格です」
「……やっぱり相手が必要ではないか」
弁明の余地もゴザイマセン。
「まあいい。一度やってみるぞ」

ㅁㅣㅌㅏㅇ

ㅁㅣㅌㅏㅇ

ㅇㅏㅁㅏㅌㅡㅇ

ㄱㅣㅁㅎㅡㄴ

「やはりな。 単独練習がアダとなり、 相手とのやりとりで無駄な動きが出てしまってる」

ひー……要するに全くできてないってことですね。

うう……孤独練習頑張ったのに……心がオレテシマウ。

「ボールの落下地点を想定して、 落ちて来る前に両手は準備しておけ」

「は、 はい！」

言われた通り、 動くがどうにも頭と体がかみ合わず、

そのせいで上手くいかない。

「難しく考えるな。 ただボールを見る事を意識して、

全身使って捕らえる事。 もう一度行くぞ」

「はいっ！」

「よっと！！」

体育の先生の説明は、どうにもわかりにくかったが、
群青路先生の指摘は、実に的確でわかりやすい。

――やっぱり違う。
一人でやるより、相手がいる事で見えてくる間違いとか、
練習量とか……自分がいかに無駄な動きだったのか、
身を持って痛感する。

「それでいい。今の感覚を忘れるな」
「はい！！」

おかげで、大分上達した気がするが、もうフラフラだ。

「よし。今日はここまでとする」
「は、はい……ご教授、ありがとうございました」
「……」
「あの？　先生？」
はぁ はぁ
ふぅ ふぅ
……何か変な事言った？　発音とかおかしかったか？
「……なんでもない」
そうですか……
「先生のアドバイスわかりやすかったです！　詳しいんですね」
「学生時代、授業でやらされただけだ。球技は苦手ではないが、どちらかというと剣技の方が教えやすいがな」
「剣道の顧問ですよね。前に部員が練習してる所を見かけましたが、迫力あってかっこよかったです」
「……ヤル気のない輩ばかりだったがな」

「よし。今日はここまでとする」
「は、はい……ご教授、ありがとうございました」
「……」
「あの？　先生？」
はぁ はぁ
ふぅ ふぅ
……何か変な事言った？　発音とかおかしかったか？
「……なんでもない」
「先生のアドバイスわかりやすかったです！　詳しいんですね」
「学生時代、授業でやらされただけだ。球技は苦手ではないが、どちらかというと剣技の方が教えやすいがな」

「剣道の顧問ですよね。前に部員が練習してる所を見かけましたが、迫力あってかっこよかったです」
『……ヤル気のない輩ばかりだったがな』

どういう意味だ？
「……にしてもお前すごい汗だな……シャワーしてきなさい」
「いえ。部活やってない帰宅部なので……いいんです。それにこれただの汗っかきで」
「ベタベタして気持ち悪いだろう？　私が許可するから行ってきなさい」
「えっと……ありがたいですが……バスタオル持ってないので」
「私の予備の分がある、それを使いなさい」
「な、何から何まで……すみません」
良い先生だ。おかあさんと呼びたくなったよ。
「ああそれと使うなら一番奥のシャワー室にしなさい。他のシャワー室は水の出が悪いらしい」
「はい、わかりました」

どういう意味だ？
「……にしてもお前すごい汗だな……シャワーしてきなさい」
「いえ。部活やってない帰宅部なので…いいんです。それにこれただの汗っかきで」
「ベタベタして気持ち悪いだろう？　私が許可するから行ってきなさい」
「えっとありがたいですが……バスタオル持ってないので」
「私の予備の分がある、それを使いなさい」

「な、何から何まで……すみません」
良い先生だ。おかあさんと呼びたくなったよ。
「ああそれと使うなら一番奥のシャワー室にしなさい。
他のシャワー室は水の出が悪いらしい」
「はい、わかりました」

元也

ぷりぷりかーか

『あ～～～きもちぃ～～～』

学校でシャワーだなんて、なんか不思議な感じ。

……運動し終わった後、ベタベタしてて

嫌だったけど、やっぱりシャワーっていいなぁ

『……なーんみょーほーれーん』

学校で滝打たれ修行ごっこもできる喜び……あ

……ふと、自分の肉に気づいて触って現実に戻る。

……お腹だけじゃなく、ふとももや二の腕……肉
このむにむにブタがあるから、着替えとか
見られたくないんだよな……。

クラスの女は皆ホッソイけど、私は違う……豚だ。

いくら運動をがんばってるとはいえ、家に帰ったら
いつもより、ごはんパクパク進むんだよ。しかも昨日は
チーズチキンカツだよ？親の作った美味しいごはんは
ありがたく食べなきゃ罰が当たる。

だから、ご飯全部平らげちゃった♥（死亡）

……前までは、独り虚しく練習していたけど、
群青路先生のおかげで、バレーボールの練習すごく
楽しかったし……

……群青路先生

どういうわけか、その名前を呟いてしまう。

厳しくて怖いって印象だったけど、本当は生徒思いの
優しい先生なんだ。人は見かけで判断しちゃいけないね

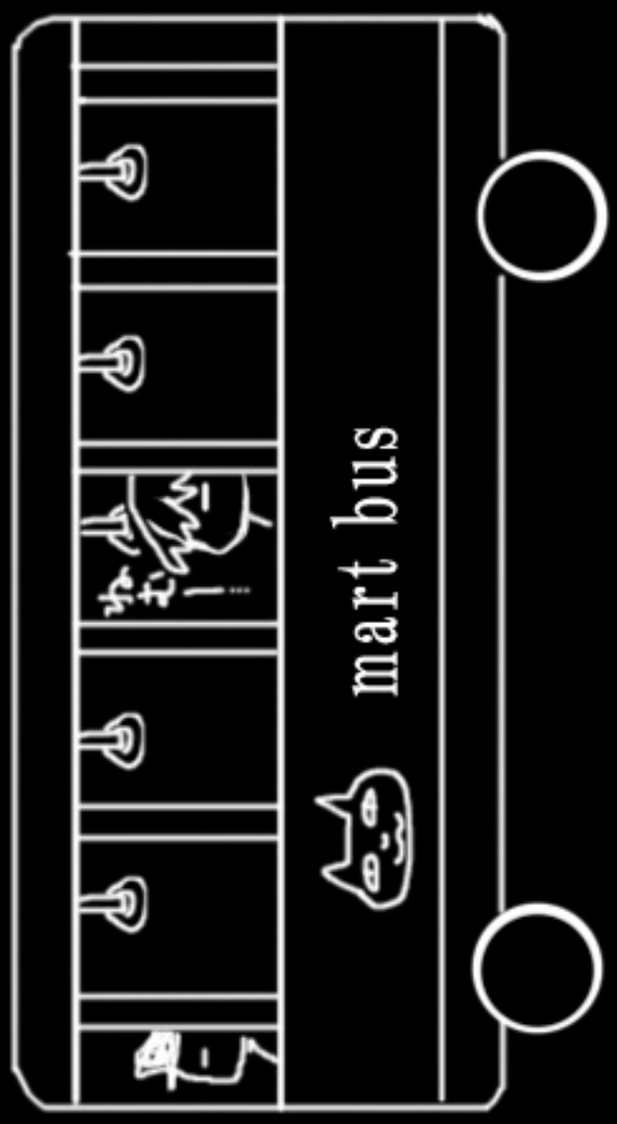
でも……ヤル気のない輩ってどういう意味だろう？

……気のせい、か
なんか……見られてるような……いやないか

「シャワーありがとうございました。いやぁスッキリしました」
誰もいない静かな昇降口に、先生は待っていてくれた。
「……髪。まだ濡れてるじゃないか」
「おぉうっ！？」
先生は持ってたタオルで私の頭を拭いてくれる。
まるで世話を焼いてくれるお母さんだ。
なんて言ったらご臨終な事になるので、心の中にとどめておこう。
「どうもすみません……それとバスタオル
ありがとうございました。洗って返しますね」
「いい。そのまま貰おう」

「え、いやいやそんな……汚れてますので私の方で洗濯を」
「いいから出しなさい」
えええええ……で、でもい、いいのかな??
おそるおそると湿ったバスタオルを手渡す。
受け取る先生の手って、岩みたいにゴツゴツと大きい。
背は高くてスラッとしてるのに不思議。
ちなみに私の手は、ずんぐりむっくり……美しくない。
あ。もうすぐバスが来る……
「あ……あのバスタオル申し訳ないです。すみませんバス来るので、失礼します！今日はありがとうございました！お疲れ様です！」
「……お疲れ」

バスの窓から見える世界って、
いつもより広く見えるのはどうしてだろう？
……先生とやり取りしたから？
それに……まだドキドキしてる。
いつもより、ドキドキして……どうして、かな？
お腹空いてるから？　ジャンボフランク買って帰ろう



ありがとう

んんーーーーーー！
のび～～っと空に向かって、体を伸ばす。

昨日は先生の指導のおかげですごく上達した気がする。
やっぱり相手がいるだけで、こんなにも違うんだな……

上達はしたけど、成果はどうなんだろう？
あ、でもわかった事は一つあった。

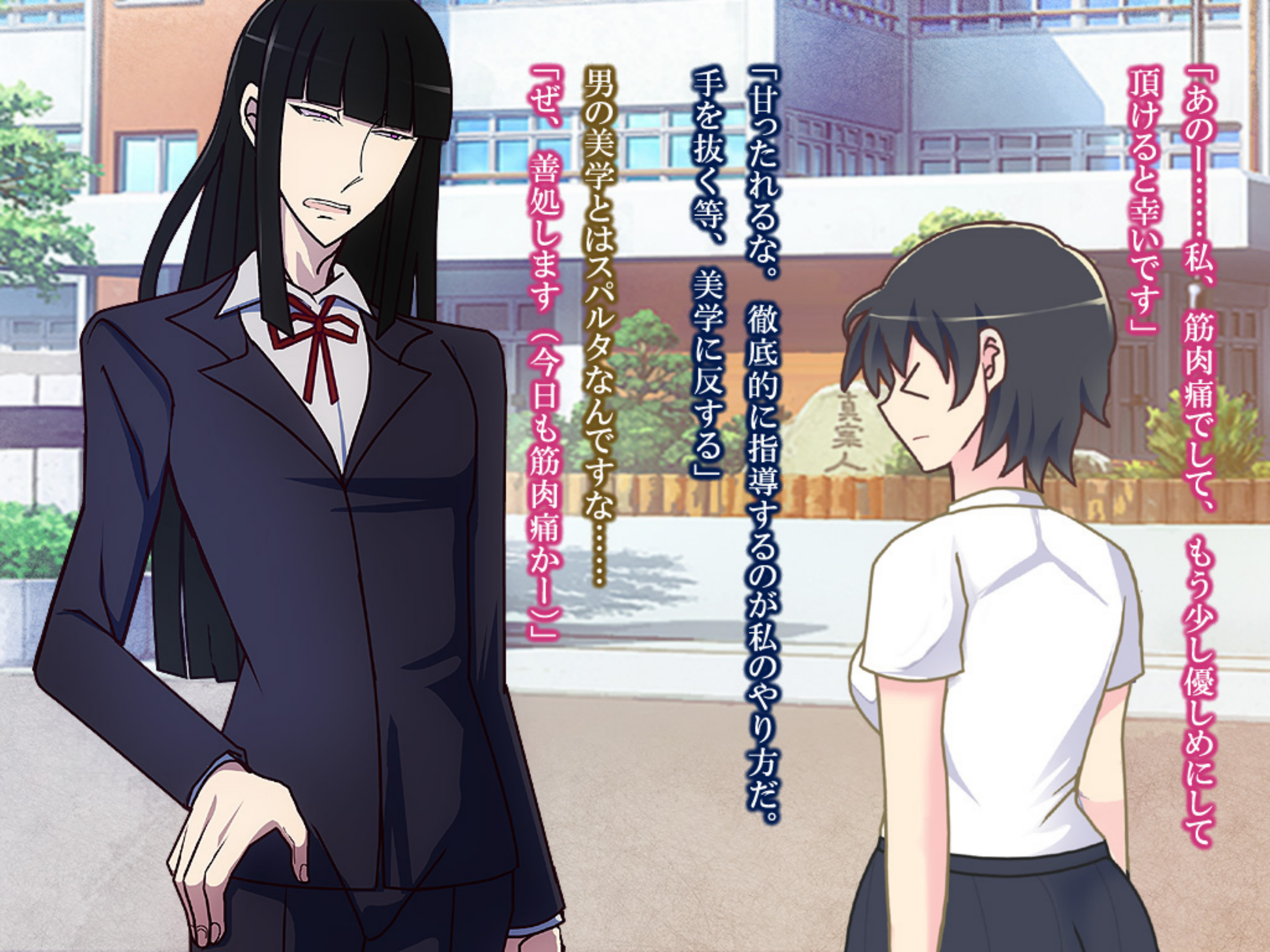
筋肉痛がああああああああああああああああああああ

一応バイトで足腰鍛えてるとはいえ、あ～～～～～

「あ」

ふと、昇降口前に見覚えのある人影があると思ったら、
あ、やっぱり。群青路先生が立っていた。
ただそこにいるだけなのに、背筋がピンとしてて
品格があって綺麗……男の人なのに、綺麗って表現は
おかしいけど、褒めるとなったらその言葉が的確だった。
真宝人

「お、おはようございます、群青路先生」
「……おはよう」
「昨日は練習に付き合って下さって、ありがとうございました。おかげさまで、筋肉痛になりました」
「そうか。今日も同じ練習量でやるから覚悟しておけ」
なん……だと……？


「あのー……私、筋肉痛でして、もう少し優しめにして頂けると幸いです」
「甘ったれるな。徹底的に指導するのが私のやり方だ。手を抜く等、美学に反する」
男の美学とはスパルタなんですな……
「ぜ、善処します（今日も筋肉痛かー）」

「……行きなさい。授業始まるぞ」
毅然とした態度は、いつもの厳しい群青路先生だった。
昨日の少し優しい先生なんていなかったのかなと、
少しションボリしてしま…いや、先生は先生だ。
業務で忙しいのに、わざわざ時間を作って私に
付き合ってくれたんだから……頑張って合格しないと！
「はい。失礼します！」
もう負けたくないって、決めたんだから！

ずかな

「……水……必ずいる」

いつものように下駄箱を開けたら
捨てた筈の清き思ひ出……
中身は案の定、捨てた筈のビデオテープ一つ。

イタズラにしては度が過ぎているし……気持ち悪い

周囲を見渡してみる。
下駄箱から靴を取り出している人は目につくが、
私のように、イタズラされてる人はいないみたい。
というか、私だけ？
何がしたいんだよ……まったく……

――聞こえるチャイムの響く音に
嫌な気持ちを引きずりながら、付近のゴミ箱に
捨てて教室へ向かった。
朝は穏やかに過ごしたいもんです……

放課後

今日は最高気温らしく、夕暮れでも十分
ムワッっと熱気づいた空間のおかげさまで、
元気ビッショリ汗をかいていた。あまりの蒸しぶりに、
向かいにいる群青路先生が、蜃気楼のように
ぼやけて見える……

「～～～～～？～～～～～」

先生がなにか言ってるが……なんだって？
難聴じゃないけど、うまく聞き取れない。

……それにしてもぼやぼやしてくる……
気のせいか、遠くからキィンと耳鳴りがして……
やばい……まずいかも。

首を横に振って見上げると視界に、
ふわふわとチョウチョが舞っていて……

いやこれ、でかいおにぎり……？

しかも海苔の巻いてないおにぎり……

「っは……」

…あれ？　ここは？

薬品のような匂いがして……

ああそうか私……倒れたんだっけ？

間抜けだぜ。

「気が付いたか？」

!? ぐ、群青路先生……なぜここに??
「軽い熱中症だ」
……そうだったのか……あ、思い出してきた。
意識スレッスレだったけど、先生が私を
運んでくれたのをなんとなく……思い出して……
重い……だして?

「す、すみません先生！　私めっちゃ重かったですよね！？
こんな豚野郎を運んで下さって申し訳ないです！」
「ああ待て。いきなり起きるんじゃない」
「いえいえ大丈夫です、だいじょう……あ」

先生の言うとおり、視界がグニャアと歪んでいく……
ど、どうにか手で顔をおさえる。
「言わんこっちゃない」
すみません……
そう言って、ゆっくりと後頭部を枕に押し付ける。

「先生こそ大丈夫ですか？　今日とても暑かったですし…」
「私は何ともない。それより…すまなかったな。君の上達を優先にしたつもりが、かえって無茶をさせたようだな」
「いえ……先生は私の為に練習に付き合って下さって、寧ろ感謝してます。少し休んだら良くなると思うんで、すぐ練習に出ます」
「何を言ってる？　今日は休みなさい」
「でも……まだ私、大丈夫で」
「荻窪」
いつも怖い感じだけど、怒ってるとかじゃなく、自分の……いや生徒を想う先生の真剣な眼差しにハッとした。

「軽い熱中症で済んだからよかったものの、下手すれば
命に関わっていたかもしれない。やる気があるのは結構だが、
限度を考えてくれ」

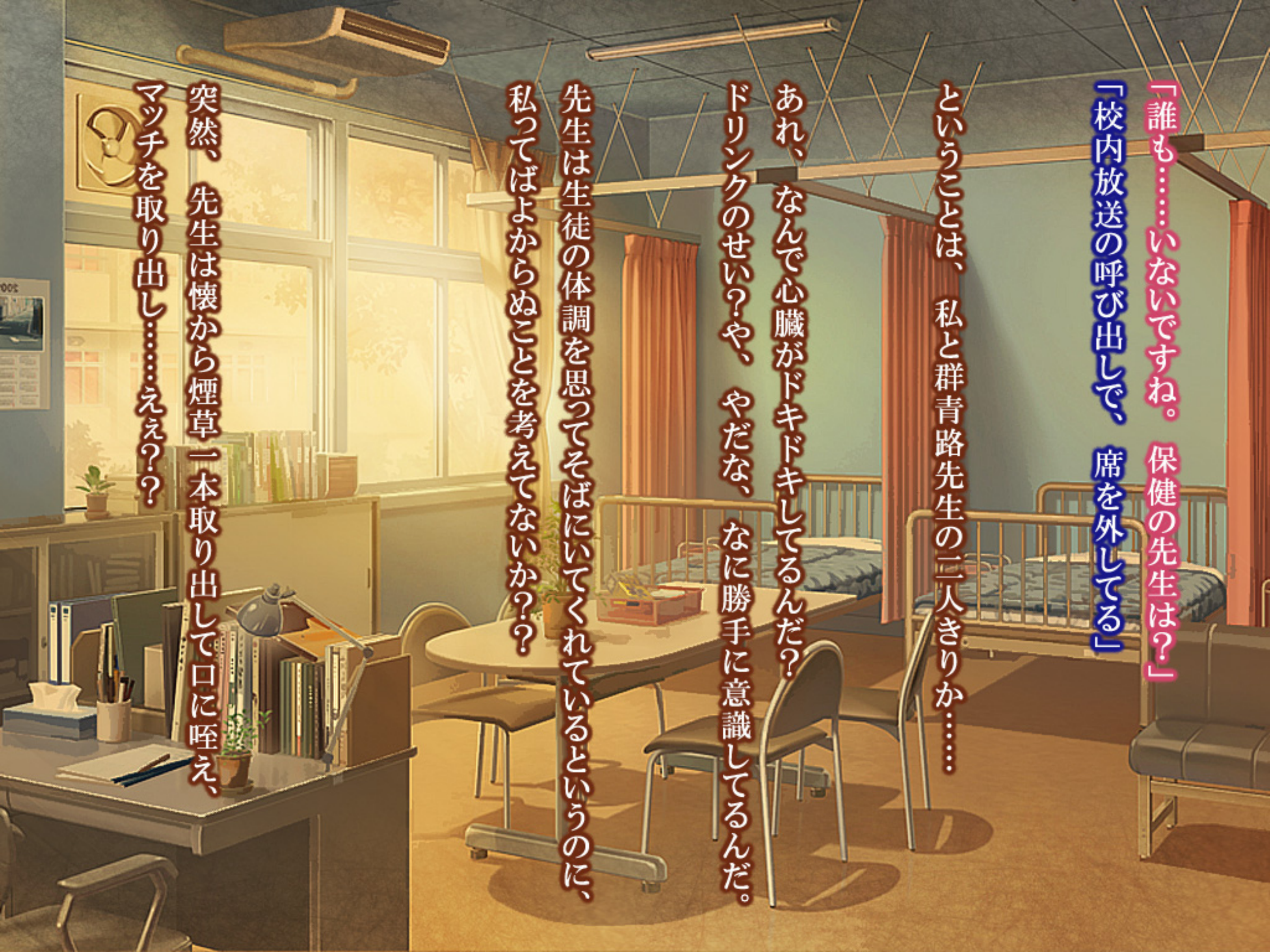
それは……そうだけど…でも

「……私、負けたくないんです。今負けっぱなしだから……
挽回したいんです」

「だったら尚更、休んでおく事だ。自身の限度把握も
勝つ為に必要なことじゃないのか？」

言うとおりだ。ただ必死に頑張って、そうすれば
いずれ報われると…どこか思っていた…でも頑張りすぎて
自滅って事もあるんだ。そんな当たり前を見落としてたなんて…

「そうですね……そうします」
「……飲めるか？」
差し出されるスポーツ飲料水を見て、喉の渇きにようやく気付く。
「あ、ありがとうございます。頂きます」
受け取ったボトルのキャップを開けて、一気に流し込む。
体内に入る液体が、器官に吸収されていくような気がする。
ふぅ……生き返った……
「おいしいです。あ、お金払います」
「いらん。気にするな」
おおう大人……何から何まですみません……。
ドリンクを飲み干し、喉が潤ったおかげで少し余裕が出てきた。



「誰も……いないですね。保健の先生は？」
「校内放送の呼び出しで、席を外してる」
ということは、私と群青路先生の二人きりか……
あれ、なんで心臓がドキドキしてるんだ？
ドリンクのせい？や、やだな、なに勝手に意識してるんだ。
先生は生徒の体調を思ってそばにいてくれているというのに、
私ってばよからぬことを考えてないか？？
突然、先生は懐から煙草一本取り出して口に咥え、
マッチを取り出し……ええ？？

「先生。ここ保健室ですよ」
『……っ』
無意識だったのか、すぐに咥えた煙草を取る。
……意外と抜けてる所があるんですな。

ふしぎだ……日本史の先生が私の練習に
付き合ってくれてるけど、今まで、会話とか
してなかったから……まだ気まずいな。
何を話せばいいのか…
「……部活入らないのか？」
突然の問いかけに、思わず面食らってしまう。

「筋は悪くないのに部に入らないのは…
…もったいないと思ってな」

悪くないですか？　嬉しい……

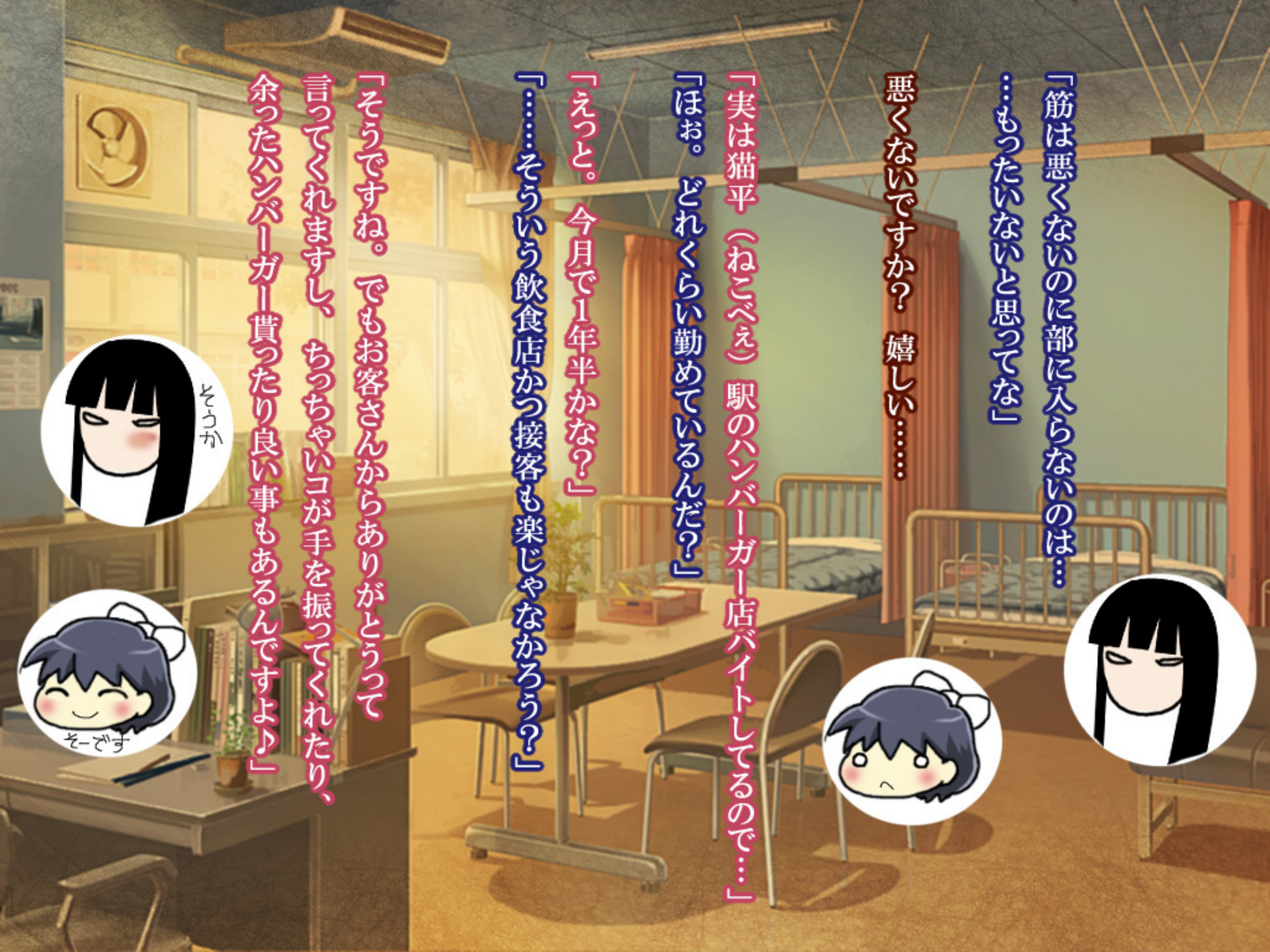
「実は猫平（ねこべえ）駅のハンバーガー店バイトしてるので…」

「ほお。どれくらい勤めているんだ？」

「えっと。今月で1年半かな？」

「……そういう飲食店かつ接客も楽じゃなかろう？」

「そうですね。でもお客さんからありがとうって
言ってくれますし、ちっちゃいコが手を振ってくれたり、
余ったハンバーガー貰ったり良い事もあるんですよ♪」



「先生は、どうして教師になったんですか？」
なんか流れ的に職業の話になってきてるな。
「…給料が安定している。福利厚生もしっかりしている」
なんて現実的な動機…でもそういうのも大事だよね。

「てっきり、なりたかったとか、憧れてたからとかだと思ってました」

「……あったかもしれんな」

何だろう、いつもの群青路先生なのに……どこか別の人に見えた。だからなのか、胸の辺りがシクシクする。

「あ、ごめんなさい私に付き合わせちゃって……先生、剣道部に行かなくていいんですか？」

『……その必要はないのでな』

？なんかその言い方だと……

ガラ

「すいませ～ん遅くなりました～あ～
群青路先生ありがとうございました、あとは
お任せください」

戻ってきた保健の先生と交代するかのように、
群青路先生は、ゆっくり休んでなさいとだけ言って
出ていってしまい……少し寂しくなる。

「荻窪さん大丈夫？　お水でも飲む？」
「大丈夫です。　群青路先生のおかげで大分落ち付きました」
「それはよかった。　群青路先生って見た感じクールだけど、意外と生徒思いな所があるのよ。　隠れ熱血というべきか……寧ろ過保護かもね」
それは……今日の介抱で少し思ったかも。過保護かどうかはわからないけど、とても優しい先生だ。
「それなのに……あんな事が起きるなんて運が悪いわよね」
「あんな事？」
「あら知らないの？　有名な話よ？」

「ご乗車ありがとうございます。このバスは終電、
猫平駅前に到着いたしますので……」

帰りのバス……

窓から見えるオレンジ色の世界を眺めていた。

夏のオレンジは、いつもより切なく見えるのは

どうしてだろう……

ここだけの話にしといてね。

――剣道部の顧問って、誰もやりたがらないの。

当時の剣道部は、お酒や煙草を部室に持ち込んでダラダラしてる問題ある部でね。それを見た群青路先生が、自ら顧問になると名乗り出たのよ。

教頭先生方が半年間、成果を出さなければ剣道部は廃部にするっていう忠告も聞いていたから、尚更どうにかしようとしてたの。

群青路先生は、大会へ行けるよう目標を掲げたんだけど、ずっとダラダラしてた部員が、いきなりヤル気なんて起こすわけないでしょ？

それにほら、群青路先生って言い方が厳しいから、その温度差で部員達と何度も衝突したの。

保健の先生の言葉に、ずっと愕然としている……
群青路先生は剣道部の相続を頑張っていたのに、
そんな結末に……後味の悪い小説を読んだ気分だ。

それどころか、笑い話として話す保健の先生も
他の先生達の態度にどうしても疑問を持たざるを得ない。

そりゃ言う事を聞かない生徒が悪いのはわかるし、
対応も大変だからそう望んだ先生達というのも
わかるけど……それでも釈然としなかった。

群青路先生が、私のことを気遣ってくれたのも、
そういうことがあったからかなと思うと……

余計、胸が締め付けられる……

――せめて……
せめて私は途中で投げ出さないよう、
先生の指導をしっかり教わって……
バレーボール頑張ろう。